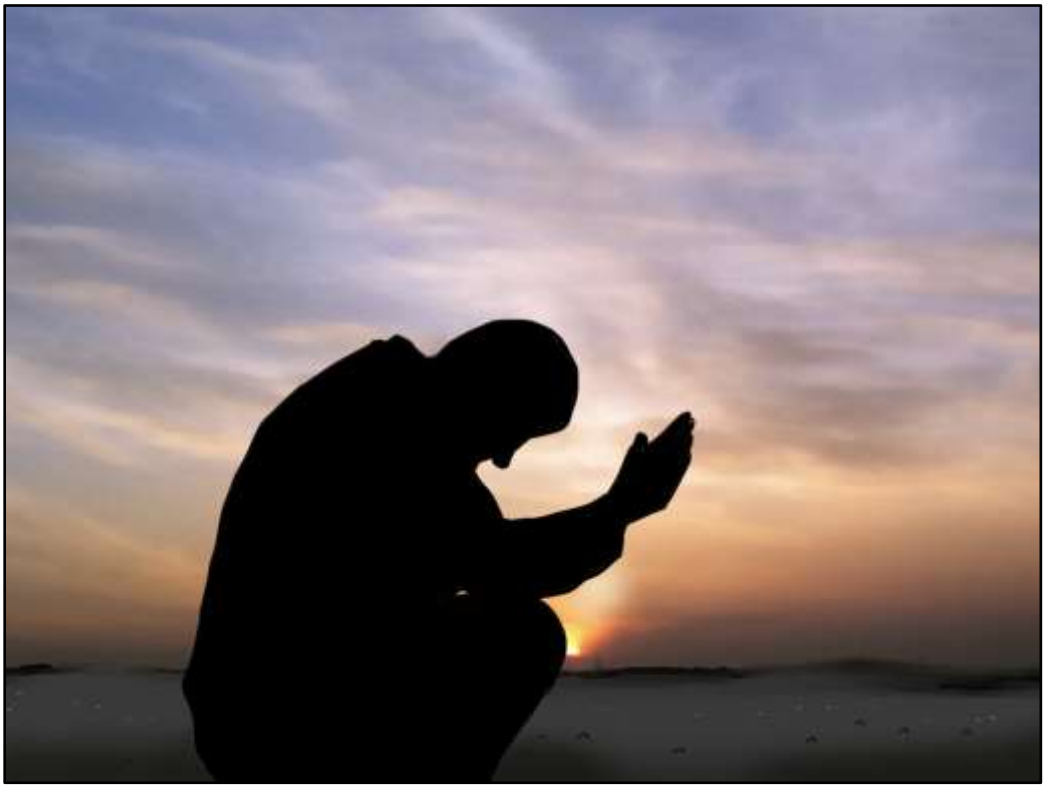

姪っ子「ねえねえ、おじさん、どうしたの？」
団長の妻「ああ・・あれね。震災後からずっとなの」
姪っ子「何を祈ってるの」
団長の妻「お祈りねえ・・・・今は祈りにかわてるかもね。でも最初はお詫びしていたのよ」
姪っ子「お詫び？」
団長の妻「おじさんの向いてる先に故郷　浪江があるのよ」
姪っ子「そうなんだ。でもなんで浪江にお詫びするの？」
団長の妻「おじさんね。浪江で消防団の団長していたでしょ。あの日、助けられなかった命にお詫びしてるの」
姪っ子「今も、4年間も毎日！」

「表紙」
浪江消防団物語「無念」
この物語は2011年3月11日、東日本大震災において大地震、大津波、そして福島第一原発事故に見舞われた浪江町の消防団の物語です。この物語は事実に基づいて作られた物語です。なお、登場人物は架空のものです。

「消防団は只今より住民の避難誘導並びに現地調査にあたる。
現場に出るが、二人一組で行動し、余震や津波には十分注意すること
危険を感じたら速やかに避難、
なお現地調査の最中、生存者等を発見した場合は速やかに災害対策本部に連絡。
以上、速やかに行動に移れ」
「了解」

3月11日午後6時半
団員1「おおい、だれかいねえか。居たら返事しろ。声がだせねえときは周りのものをたたいて音をだせ」
団員2「おお、あっちの方で物音がしたぞ」
団員1「どっちだ」
団員2「こっちだこっち。お～い、だれかいるのか」
被災者「ここだ」
団員1「大丈夫かあ。すぐに人呼んできて助け出してやっからな」
被災者「ああ、頼む」
団員2「待ってろよ。今、消防隊員くるからな。まってろよ」
団員1「こっちでも物音がすっど。こりゃ、俺たちの手におえねえ。照明や機材もいっから、早く帰って救助隊員に頼むぞ」

被災者（おばあさん）「ありがとうなあ。助かったよ」
団員1「ばっちゃん、よく寒い川の中でがんばったな」
被災者（おばあさん）「ああ、家ごと津波にのまれてなあ。気が付いたら柱の欄干が見えたもんで必死につかまっただ」
団員1「そうかあ、そりゃえがった。ありゃ血がでてでねえか。すぐに病院まで連れて行ってやっからな」
被災者（おばあさん）「家さ流されたときじっさまもいたんだけど。どこかここいらにいるはずだ。オラはエエからじっさまを探してくんろ」
団員1「わかった。ばっちゃんを病院につれていったら、必ず探しにくるから。これからどんどん暗くなるだろ照明とか機材がいるんだ。とりあえずばっさまを病院に送ったら、消防署の職員に来てもらうから、とにかくオラと一緒に病院さいってくれ。ばっさま一人、残しておくわけにいかねえべ」

団長「よしー旦みんな帰るぞ、皆、いるか」
団員1「綿部は？綿部がいねえぞ」
団長「無線で連絡とってみろ」
団員2「さっきから呼びかけてますが、ダメです。返事がありません」
団員1「綿部のやつ、ギリギリまで避難よびかけていたからな。まさか・・」
団員2「消防団の車が流されるのを見たって人がいました」
団員1「ええっ！」
団長「バカいうでねえ。綿部は運のついい奴だ。絶対大丈夫だから心配すんな。先に本部に行ってからな！」

団長「課長、救助に行けないとはどういうことなんだ！」
課長「災害対策本部の決定です。午後8時を持って救助活動を中断。明朝をもって再開するとのことです。今から救助活動のため出動するのは危険です。とにかく朝までまってください」
団長「朝まで待てねえ。オラたちはよくっても、あそこで助けさ待っている人たちが寒さの中で、ずぶぬれになってんだど。一刻も早く行ってやんねえと・・朝まで持たねべ！」
団員「照明器具とか機材を準備し早く言ってやっぺ！」
課長「ダメです。余震が続き、津波警報が出る中、あぶな過ぎます。現地は知っての通り、真っ暗で危険極まりない。こんな中、行くと二次災害になります。お願いです朝まで待ってください」

町役場職員「両竹諏訪神社に50名の町民が取り残されているとの連絡がありました。救助を求めています。消防団、いけますか？」
課長「現場の様子は？」
町役場職員「浪江請戸地区の道路はダメです。国道6号線で双葉町に入り、そこから歩いていくしかありません。ただ参道の一部が崩れ、応急処置の必要ありとのことです」
課長「消防団、向かってくれますか」
団長「了解しました。浪江消防団請戸分団　住民の救助にあたります。」
課長「お願いします」
団長「50人乗せるだけの車はありますか」
課長「町のマイクロバスがあるので使ってください」

団員1「ここだここ、土嚢もってこい」
団員2「おーい、こっちだこっち」
団員1「だめだ。階段を直すぞ。とりあえずここにつむんだ」
団員2「ライト、こっちさ照らせ。おーいスコップもってこい」
団長「さあ、みなさん、こちらです。足元が悪いので気をつけてください」
避難者「消防団の皆さん、ありがとう。助かりました」
団員1「大丈夫ですか？あちらにバスが来てますから乗ってください。もう大丈夫ですよ」

団長「ええか、年寄りと子供から乗せるんだぞ」
団員1「おーい、次のバスが入ってくっぞ。道さあけろ」
団員2「よけて、そこよけて」
団長「住民乗せたら人数と名前確認しろよ」
団員2「どこへ行くんですか」
団長「とりあえず浪江の役場だ」
50人の町民を無事、救い出したときは既に時計の日付は変わっていました。
明け方までのわずかな時間、休息を命じられたのです。

団員1「寝ろって言われても寝れねえよな」
団員2「そりゃそうだ。全然眠くねえ」
団員1「津波にやられた人、寒いだろうな」
団員2「そのことは言うな。余計寝れなくなる」
団員1「ああ、そうだな」
団員2「朝まで2時間、忙しくなっからな。少しでも体やすめるべ」
ドタドタドタ
団員1「なんだえらくあわててるけど」
団長「原発だ・原発がやばいことになってる見てえだ」
団員1「なにい。原発が壊れたのか」
団長「爆発の危険がある見てえだ」
団員1「なにい。原発が爆発したら終わりだろ」

町長「福島第一原発事故の影響で3月12日午前5時44分　避難勧告が10km圏内に拡大され、請戸地区は立ち入り禁止になります」
団長「「そっそんな。あそこには救助を待つ人がたくさんいるんです。見殺しにはできません」
町長「立ち入り禁止となった以上、あなたたちに行けとはいえません。救助は消防署員と自衛隊がタイベックススーツを着て対処します。皆さんにはそうした装備がないので基本、近づけませんが、車の中から10km圏内にいる住民に避難を呼びかけてください。」
団員1「そんなに原発はあぶねえのか」
町長「危ないかどうかはわかりません。東電の職員の様子からすると明らかに普通でないことがおきています。車で回るときは必ず窓をしめ、できるだけ外に出ないようにしてください」

3月１２日　浪江町消防団には住民の避難誘導が命じられ、救助活動は陸上自衛隊及び双葉消防署の手にゆだねられました。しかし同日午後3時36分、福島第一原発1号機、水素爆発。ドンという音とともに山影にあがるきのこ雲を確認したのは避難先の狩野小学校で住民のために炊き出しをしているときでした。
だれともなく「終わったな」とつぶやいたのでした。
その日、消防職員、自衛隊員も浪江町から避難を余儀なくされたのです。そして二日後に3号機が爆発しました。

「これで避難所、変わるの何回目っだ？」
「7回だか8回だか、よくわかんねえ。オラはいいけどとしょりはこだえるよな」
「ところで4月22日をもって消防と自衛隊が捜索を再開したらしいけど、どうなんだろうな」
「消防の職員が言ってたけど、あの日からひと月以上たってるだろ。ひでえ状況らしいんだ。あがった遺体も痛みがひどくって見らちゃもんでねえ」
「やっぱ遺体があがってっか」
「オラたちが報告した場所からも、あがったみてえだど」
「そうかあ、やっぱりなあ。畜生あん時、助けておけばよー！助けておけば助けられた命、あっただろうに」

団員1「すまねえ。すまねえ」
団員2「俺たち、許してもらえないんだろうな」
住民「そんなことはねえ。おめえたちが悪いんでねえ。すべては原発だ。原発がわりいんだ。あまり自分をせめるな。町のもんは消防団に感謝してっから」
団員1「原発さえなければ、放射能さえなければ、俺たちだって救助活動に参加できたんだ。まだまだ助けられたはずだ。悔しい！原発事故さえなければ！」
あれから5年になろうといていますが、今なお多くの消防団員は助けられなかったことを悔やみ、苦しんでいます。
迫りくる炎と違い、匂いも熱も感じない放射能
見えないだけに対処の方法が分かりません。
見えだけに、どこまでも恐怖は膨らみ続けます。
わからないだけに、いつまでも救えたのに･･･という無念は消えません。
わからないだけに、帰れるのか帰れないのか、帰っていいのか、帰ってはいけないのかの判断はできません。

原発事故を交通事故と比較し、事故による死者数は少ないという人がいます。
単に数字の比較だけでは原発事故の無情さは伝わりません。
見えない恐怖、わからないことに対する不安は何時までも、いつまでも人の心を傷つけ続けるのです。
それが原発事故です。
この物語を通して少しでも理解が広がることを願っています。